



13
3476
8

十口編子卷之内

三十二

松野
勝首院

南總里見八大傳第九輯卷之三十二

東都 曲亭主人編次

第百五十四回 憲重憲儀聚兵使を同く去

復説箕田馭蘭二根角谷中二元栗專作們の近村より來りて莊客を尋く斫
 仆し或は擗捕するもの有種並に穂北の里人の往方も知るる一ふの日の功るを
 怖れて隊の兵と母下知りし既死し近村見五六名を尚燃残る火の中二箇二
 箇投入さると思ひの隨焼し其首を皆斫會さる其頭ハ一口の大刀の燔
 刃ありければ是究竟の東西とぞ首級と共に合持す勝岡之聲揚さる當晩
 五鼓の左側ハ五十子の城から來りければ隨即上るや臣も御路を急ぎ穂
 北へ推寄せし有種並に那里人們の世智人が擗捕れを知らて免れりとも

八代傳九輯卷之三十二

文藝堂藏

思ひけり。里の家毎々自焼して逃亡す。力及ばず。逃後れる奴毎々搦捕らひて開か
 る。有種の家の焼迹。自滅の屍骸五六個あり。又その中一人腹を斫る。是
 必有種と。思ひけり。生拘の逆徒。見せしむ。皆燔熾り。其の分明を。是
 稟せども。其亡骸の邊。灰を埋れる。大刀あり。猜し。其大なる。是有種と。因
 ん。因て。御実檢を。なせしむ。と。實事。一。有司。其五六級の首と。燔る
 刃と。遞與。けり。あれも。燔首。され。實檢。及。れ。れ。而。次。の。日。根。角。谷。中。二。箕
 田。取。蘭。二。と。俱。主。君。定。正。見。參。定。正。則。谷。中。二。今。番。の。功。を。答。言。さ。す。且
 恩。命。あり。今。より。忍。岡。の。城。を。退。り。故。の。如。く。城。の。頭。人。を。一。因。て。穴。栗。專。作。を。谷
 中。二。の。小。隸。て。他。を。忍。岡。へ。遣。さん。間。常。士。卒。を。敬。言。め。宜。く。非。常。の。備。へ。但
 志。逆。徒。有。種。も。首。級。の。虚。実。分。明。さ。す。故。の。權。且。梟。首。の。及。ば。ず。然。れ。世。智
 介。と。利。木。八。自。餘。の。逆。徒。も。刑。罰。を。受。べ。る。異。日。尚。有。種。似。者。と。搦。捕。る。も。

あ。他。等。も。誰。う。と。真。と。雁。と。知。る。者。あ。え。當。城。の。穂。北。へ。遠。り。則。件。の。罪。人
 們。を。谷。中。二。汝。預。け。ん。忍。岡。の。城。へ。領。て。仍。く。那。里。の。牢。金。只。用。籠。措。て。猶。餘
 類。を。穿。數。金。せ。と。言。叮。寧。の。課。を。谷。中。二。欣。然。と。言。美。と。あ。退。り。隨。即。穴。栗
 專。作。の。館。の。仰。箇。様。々。と。宣。示。一。准。備。を。各。て。却。獄。吏。より。世。智。介。並。利。木。八。夫
 婦。と。自。餘。の。生。拘。兒。們。を。皆。受。令。と。故。の。忍。岡。隸。を。走。卒。奴。隸。小。牽。せ。俱。五
 十。子。の。城。を。退。り。て。忍。岡。へ。程。の。妻。恋。阪。の。頭。を。來。け。る。時。前。面。より。人。連。立。て。ま
 く。這。方。へ。來。り。是。則。別。人。を。多。く。那。穂。北。の。近。邨。を。壯。客。の。御。向。取。蘭。二。谷。中
 二。們。が。與。不。或。斫。殺。され。或。の。結。榎。ら。れて。五。十。子。の。城。へ。牽。れ。者。の。宅。眷。へ。逃。る。邑
 人。小。事。恠。と。知。り。て。且。衣。も。且。忍。不。堪。され。俱。五。十。子。の。城。へ。參。上。り。事。は。冤。枉。を
 訴。て。生。拘。ら。れる。良。人。弟。兄。と。極。合。ふ。と。商。量。さ。す。其。訴。訟。見。二。十。名。村。正。と。先。の
 立て。ま。谷。中。二。們。不。逢。ひ。る。件。の。邑。人。の。宅。眷。毎。良。人。弟。兄。叔。侄。の。面。を。緊。く。

郷られて相牽るるを見るは堪はず。何故ぞ。其妻兒子の前後もこそ携
て粘り哭哭へ其餘は合中二の去向を塞ぎ宛と叫びて俱云云訴るを合中
二も耳も被け眼も腫る聲苛辛。這奴們其大胆に法度を怖れ上と蔑
みて。這罪人等中途で大奪取多く欲する向でも有種が支黨なる疑ひ
る。搦捕りねと喚れ従ふ走卒奴隸も羨りぬと答へ果敢勢ひ悍く走り鬼て感
蹴仆し毆た伏せ囚索被る升が中のみ餘る者れは作刀と拔是れりて多敷
せと罵懲と權威を勝りもる。壯伎の脚疾に忽地激と逃去て非理非法なる
遇ひ只老と婦幼の結ねられて泣叫ぶを追立々新舊共忍固の城へ牽
りて死囚牢に入れり。信而根角谷中二の次の日宛栗專作と五十子の
城へあつて昨日又中途で有種が支黨を引く搦捕ひを其交名を注進に皆
是筋る証言を定正法に。竟不悟を連る功ありと譽て猶その後心

子。追捕のく憚るべくと捉り專作に還されり。然る件の邑人們の二
びも非法の緝捕の良人を殺され弟兄牢舎に敷承れる。怨む其冤を又訴す
欲され先度懲りて果し陰謀致し心あり足夫して東八州の管領の盾衝く
術のあつた打歡くの猶餘殃の這一御係を幸せりとを辱す思返して黙止
け。現乱世とらゆる上法の守るる。下怨の遣る方今尚あも孔子あふ又春
秋を為らん欲と識者へ嗟嘆不堪さけり。介程の扇谷修理大夫定正の憎し
道節信乃毛野等の八犬士の存所及河鯉の政木孝嗣のゆきも。今番詳知
了その怨の堪され左も右も尋思を多。稍思ひつるわれも素より當家は屬城
をける大塚へ使者遣りて城主大石見守憲重其子源左衛門尉憲儀父子と
五十子の城へ招けよと閑室まで面談去當時扇谷山内兩管領の四個の大夫
中。長尾大石小幡白石是れを管領の家四老とを又持資入道道灌あ

長尾景春と共扇谷の大夫之因て長尾御田又曰御田を内管領と唱さる中
 小幡白石の山内顯定の家臣より長尾も素是山内の家の元老より一景春
 年来顯定と不和の故に遂に定正に屬れども又叛て獨立の志あり定正これを
 後悔して君臣の和順既不成るの如く景春の今も尚上野白井に在城して五
 十子又出仕せざる又持資入道道の文武の達人當家の軍師忠誠稀る良臣を
 定正の仍所所道不違ふの故に屢是を諫る野水舟横りて言竟穴谷らざるを
 諛者の為小身も亦危く位子足日が眼を東門に掛け屈原漢父の辭を為り心小
 似る時やあれ竟病着不假托て其子新六郎助友と俱に相摸の糟谷の城に
 在り忠魂義胆移るあわねど執勢いかの如くあられ久しく出仕せざるけり問話休
 題然然又定正の日大石憲重憲儀小宿恨の方方事の顛末と告ぐは
 疎あるゆれ如く那道節信乃毛野們的八犬氏の當家の怨敵刑餘の乱賊罪死を

容ざる者多小里見義成是を扶持して敢隣國の好と思ふ又我舊臣河鯉孝嗣怨
 言不忠の罪ありて是義成死刑に死せしめ折亦那惡大氏の一人也大江親兵衛仁
 喚喚做做先少年が神出鬼没の幻術を以て其日の実檢使根角谷中二麗麻呂と愚小
 多則孝嗣とて上總へ走りて里見の與に戦功あり其後孝嗣に結城を以て早瀬の川に
 陥りて死死らるも夢え或は恙ありといふ其の美いゆ日穂北の御士落點餘之七有種が
 老僕世智介と喚做を奴と擲捕りける并が招き事發覺れ且有種も亦惡八犬此
 支堂支堂より呼呼びて緝捕の士卒と遣せり穂北の賊民皆自焼して逃亡逃亡し死
 去る秋宗徒の屍骸ありといへども燔首燔首を分明るる約莫かくの如く惡黨の我
 封内封内に横行を隙と視ひ虐を施し年来里見の間者も做りて我を冠せ暴行機
 變變は皆義成が使ふ所問問ぎて知るべ死の如く抑義成の父里見義実の素是吉嘉吉の亡
 人より一安房へ流寓流寓より山下定包を討滅して神餘の迹を横領し満呂安

西を欺殺して四郡を併呑する義成も亦奸雄也其箕裘を承り上總を略
去下總までも已半國併せし尚飽とぞ知る欲敢當家と謀らむ先を奪はんと欲
人を征し後を征せんと欲する今尚斧鉞を用ひて竟に子孫の患ひを遺さんと思へども
我孤力也一朝に本意を遂ぐべからば於是再思惟る山内頭定は是同宗の管領也
譬言車の両輪の如し然ると不合のありて一旦確執及びば親族反て讐言敵の
思ひを做せんと欲する年々の日定より以來我威徳左右不如意ると叛く者回れり過て
改むと憚ると勿れといへ先頭定と和睦して両家魚水の思ひを做さ當家の武威
復振て關の八州の大小名頭を擧て我下風を立んと願ふれば我と頭定兩大將を
従ふ諸侯勇士を率て里見と一擧討滅し憎しと思悪大氏と二個も漏れ生拘
すそ八劍を做するが豈快らむ我主張は只是の意見もあらずと勢ひ猛
く談され憲重の頭を低く其子憲儀と侶共听果て答るや誠以て君の御

賢慮山内殿と御和睦の一談を臣等も豫廢幾す所當家愈御敏昌の其本意
ひげれと祝せば憲儀も亦承り目今兼のひて兩管領の御連署とて諸侯を催促
まの八州の列侯誰り亦敢不の字と者も各先を争々安房上總を五十餘城を
立地小降さる石と鶏卵を厭するも易くや憎し那惡大士等が境雄多就中大阪毛
野の蟹目御前の怨敵又大山道節の我君と射なり且臣等が老當仁田山晋吾と慘
殺す一怨あり又大塚信乃の當城へ乱入して人を屠り粟を竊とて刺辟書して辱
めたり校猾憎む餘りあり今番里見と御征伐の御催の宜定の當然と孰
を名の軍とらん早く鎌倉御使を仰付させぬかとの美駭を要するべしと相槌打
いそせ定正快然とらん領定既各同意するが敢て思ふ及ぶる石見の明日鎌
倉へ赴き宜く頭定と談す頭定我と同意して俱に里見と伐んといへ甲斐の武田
相模の三浦の招きとも來會せんとの他近國の諸大名石濱の千葉自胤の素より

當家の躬方へ又下總の千葉孝胤及結城成朝常陸の左武高久鹿嶋又許我の
御所成氏主上野の長尾景春源左衛門儀廻勤して合戦の義と談ぎ一願定合體を
たんと許我の御所も恨と思ひて必や従れん又越後片貝の服大刀自女流れども義
勇あり且故夫人蟹目前の母より告げられん片貝並白井の箕田駒蘭
二遣えん義を先とあるると言送もる宣示せ憲重憲儀言兼して俱不
大塚の城へ退りける。信而次の日大石石見守憲重の伴當より従て鎌倉へ赴
く程小一宿して第二日の朝巳牌時候山内より管領願定の邸へ造りて那家と權
臣より齋藤左兵衛佐高実の對面を請て那議を云と告て公卿。宣示君と云の情
願別義ありむ一族不和の家門の恥に當館と合體あり今より兵を合一カと
去俱小里見と討滅して且悪八大士を虜め其宿怨を復せぐ安房上總を等分り
送小數郡を加領せん義御同意する近國諸侯の大軍と合して征伐をいそぐ

修理本主を正の意束の如く宜く仰上げぬと詞を低く利誘ふ辨論詳り
於高実都てあるて躬を退て奥へ赴けり則主の願定小扇谷殿の使者大石
憲重が口状固様々と那意を具告り願定是をちて先高実の意見を
向ふ高実答て然し扇谷殿當家小叛にあり軍威振る諸侯離して只
管領の名あるの管領の威勢なり然り里見を恨る為干戈を動かす欲されども自
力不及びしければ詞を低く礼を篤くして當家の資助を頼らまを其利に及ぶ當
家小在り今其和睦を饒し合戦して俱小里見を滅し兵權愈當家小歸り
起さんとも臥させんとも館の隨意をせけれぬと吉事多小早く脚和睦あれかと
且其れ且虜れ願定連のふち點頭て其議我思ふ所と相同然り憲重對面
せ先其準備をせぬといふ高実飲み養て又客房へ赴けり苟且して願定の礼服と
装束近習を従て正廳へ出て來躬て上坐着たり老當弱當齊々と左右二側



八代傳九郎卷三十一

七

文楽堂藏



八代傳九郎卷三十一

文楽堂藏

侍り。登時齋藤左兵衛佐高実の大石見守憲重は案内をき引て主君の見
 参り入れ、頭定則坐を賜て憲重も答る。既小高実をりて告り、修理殿
 定正の来意別議。両家和睦の義、我願ふ所、且里見義成と征伐するも、其謂あり。
 両家合體。且近國の諸侯と率て俱小里見と討滅さ。遂北條長氏も兜見、
 脱て陣門の降を乞ふ。八州平治して、永く同宗の親と失至、欽び是の優まらる。
 我近死日、六御まで出陣して、那川の上まで俱お誓て異論する。則五十子の城小
 入て諸隊の軍配と定む。罷歸りて是等の義を宜く修理殿お傳へて、大義我小こ
 そと、旁ふくも親名刀一口を憲重も取ら。其後、御食饌を薦め、伴の士卒小至
 るまで、山海の珍味とりて、酒飯の儲小干らぬ。憲重主僕欽びて俱お拜
 謝し、歌舎お退りて、次の日、歸路お赴く程、又一宿、中て第二日、早く五十子城小
 かの、隨即主君定正お見参りて、山内殿の心答箇様々々と和睦同意の

事及両家合體の旗旌とて、諸侯を連ねて水陸より里見義成を伐んと云會盟
 夏、餘の所要も、倭々と漏さむ。反命ある語次、然り、由那里の款待の、
 三告て首尾の宜しきを祝せ、定正満面うち笑れる。其欽びの、
 重を勞ひ、大塚の城へ返り、其後、又石濱の千葉下總の千葉、
 成朝へ、大石源左衛門尉憲儀を使者とて、里見征伐の義を、
 定、両管領の連署とて、軍兵を催促も、又常陸の左武鹿嶋、
 谷の御田片貝の、箕田、駒蘭二と有功の老黨と使と、
 甚急ん、中、長尾、御田、服、大、刀、自、扇、谷、
 目前の母、
 管領の、
 舊、
 大傳九轉卷三十一

上杉右京亮是多
の成人成氏
の時鎌倉
管領の執
権者

義同の願定より相徇らる。然れども這面諸侯の北條長氏の厭まらる城を離まら。遠く來會きざる。或の嫡子或の親族の武功ある者や大将として士卒を進まら。と制度せられける。單詩我の足利成氏王の扇谷山内の両管領が舊怨あり。嘉吉のむら。結城落城の後成氏の兩兄春王君安王君の擒とる。て並井の金蓮寺を害せられける。成氏のと恙をて忠義の舊臣が拊養せられて世を潜びて在せし。長尾入道尚賢の父が執立まらる。鎌倉も居たり。京都將軍願ひ宣宗。是則成氏を關東の管領と仰せられける。成氏父兄の怨も堪む。情地も近臣と謀て。上杉憲忠を敷捕り。上杉の族起り立て成氏を攻て。鎌倉を追落し。且成氏の乱政を室町殿政。小朝廷もまら。則成氏を解官。上杉房頭願定を關東の管領。成されける。是より成氏詩我の城在り。屢兩上校。と戦ふ。鎌倉も。かへり。欲まら。勢も微。て。竟果。刺文明四年。至り。願定緊

成氏を攻伐。詩我の城を拔け。成氏則千葉小走。千葉陸奥守康澄を。憑て居り。徳而文明九年。十一年成氏詩我。還る。蓋兩説あり。願定僅成氏と和睦。て。初の如く詩我の城。還り入ると。饒けり。今に至りて。既七年。及成氏。願定と和睦。陽中周泰の差別あり。似れども。迭不怨を解く。由る。願定正。亦成氏と快。俱胡越の思ひを。做して。事訪ぶ。も。然。大石憲儀。是。事の願末。知り。今番の一。心許る。思ふ。却。已。伴當。従へ。則詩我。那御所の權臣と。や。横堀史。在村。對面を請ふ。里見を征伐の一。告る。不定正の。様々。と。八。事。及河鯉孝嗣の事。都。里見を非理と。評。且誘ふ。利を。以。其言果て。又。御所。御同意。俱。御旗。找め。摠大将。仰。凱旋の後。鎌倉。返。居。入。の。定。正。心。單。敢。約束。仕。る。

願定も亦同意を連署者の推言文の不在の美を以て居る御執成と請ひし
 と町寧子來意と告ぐ。件の連署者と遞與る。在村答て示談の趣ある
 侍の後刻寡君の御上へ權且歇舎を退給て御答と俟候と云言尊大權
 貴と示其憲儀則謹諾て歇店退る路の次又在村の宿所に於て土産代と録
 する其白二裏と老僕不遞與て在村贈りけり。愆而横堀史在村の件の一
 受を同僚る。老黨甲し告知ら。次の日早且成氏の正廳へ出候ふ及び。在
 村則告稟は。昨日扇谷定正主より來使あり其使者大石憲儀が口狀箇
 様々と言の顛末と述べ上て定正願定の連署とせし。軍兵催促の檄文と
 推言書と見せま。成氏疑惑の眉と頻りて在村も仰告や。那願定
 正の近屬我と和睦して權且金異不似れ。他も不恣や。君臣の礼を
 余るふ今。他もと帮助て怨も。里見義成を攻伐の義不違ふ。汝等も思

本と向きて大家阿と答る。開が中一個の老黨下河邊莊司行包列を出て。直
 やう言新あ。今戰世の人心義を守り稀。利小走る者。抑扇谷
 定正山内願定の當家舊臣の子孫。職と奪ひ地と。畧我君累世の冤家の
 あり。天の下の乱賊。願定も。鏝倉と逐まり。且管領の大職と
 奪ふ返。近も亦當城を攻落して。根と断葉と枯ま。欲り。有
 敷系小真訓。思の故。稍當城返。猶胡越。異なる。定正今
 里見を恨る。攻伐。欲ま。他。孤力。先願定と和睦。且合
 縦連衡の古轍。縁。諸侯を連。素懷を遂。故。大石憲儀
 等と説客。我。小。大利。是。豈。他。實情。况。這。軍兵
 催促の檄文。我君。編。小。一。城。の。主。と。一。列。の。思。飲。其。非。礼。大。不。敬。是。其
 是。の。や。似。る。も。里見。氏。の。祖。季。基。の。春。王。安。王。君。の。兒。與。結。城

憲実の
上杉憲
基の子
杉安房
是又清
方を憲
実の弟
上

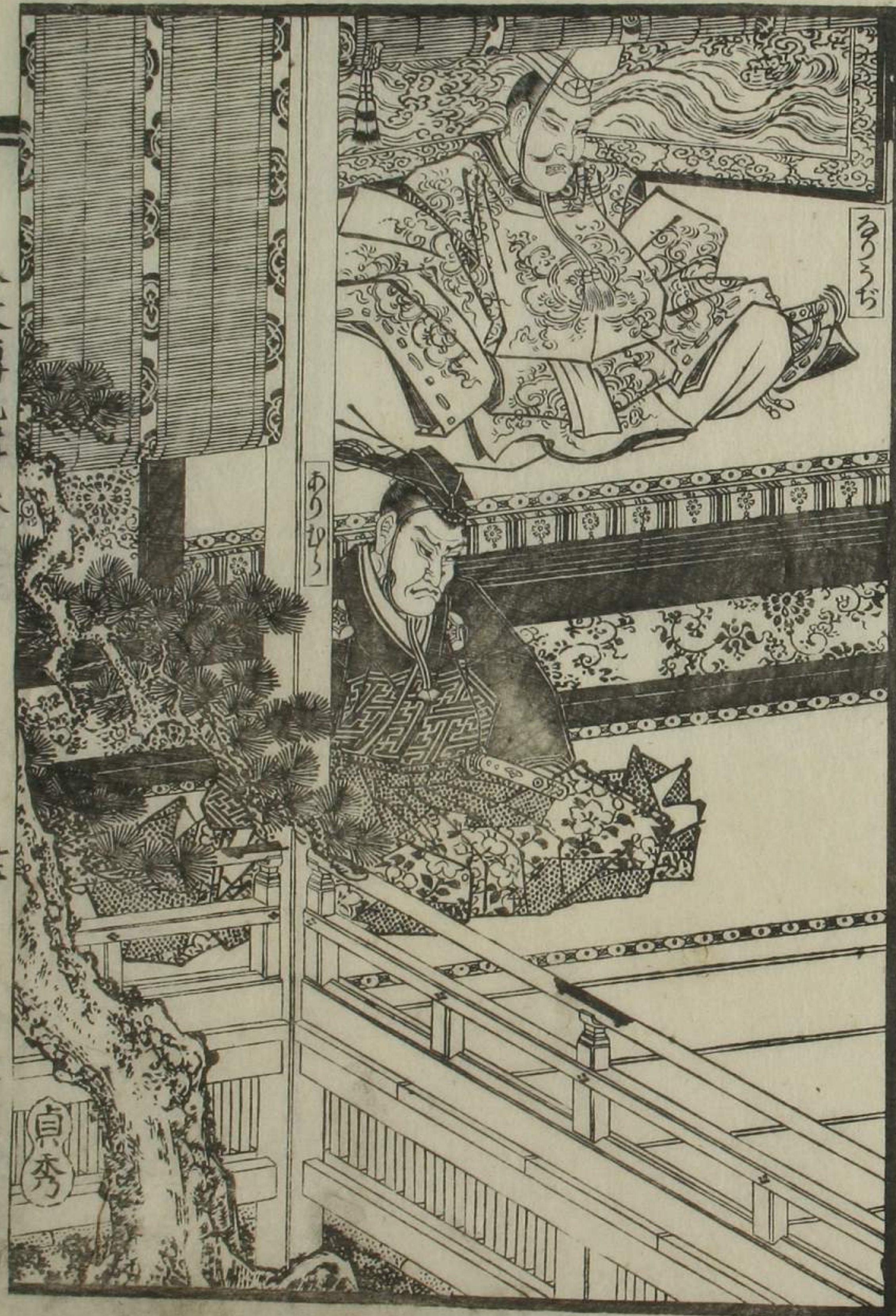
つては城のひ日小戦致ちをける忠義の今の美談と其其子義實安房へ走りて遂に其の基と開外より以来今義成の時も年始め必ず使者を遣りせしむ。父祖の舊義を失はるる。然しも今故るに不冤家と帮助せて舊義の里見を伐つて備はりしを得て備已こと得ぬるを安房へ加勢の軍兵を遣りせしむ。と憚る所も多く諫るを在村急に推禁めて主君を朝ひ々皇宗を守り目今行包の意見の如し其理あらむに似ていはしむも臣等が愚直意の同じからせしむ。先君の承亨の御滅亡を承りひ恐れ多く自業自得ぞ上杉氏の罪からぬ又是嘉吉の役に京都將軍の御下知りて憲実清方の本意をあらむに似て長尾尚賢君とて鎌倉の主を做したり一則は是舊悪を償ふとてる君のを思召さしむ。及て憲忠と害いひ一君臣亦復讎言とりて今日に至り一定正里見を憎むの所に以不則顯定と和睦合體一て君を請ふて摠大將不做なりて共侶里見と討まく欲しぬる是當家の大幸今自他の勢に似て其雌雄と討りぬる義成愚將不

年給城へ
討つたを
たりと人
本義討
回小詳
定正の清
方の子
は顯定
と從父兄
尚賢又
昌賢の
作

あまのともも僅に房總の弱兵をりて八州勁勇の大兵を防びて勝つりぬや他が滅亡の期に在りありて今定正顯定の荷擔をりて俱に里見を滅しぬる當家の大利則之も其第一定正顯定先約われ必君と鎌倉入還し入れなりて大職と譲りしもありて一其第二當家の士卒戦功あり其恩賞を安房四郡とりて御領不做さんと仰さると定正も其折辭に似てしらるべし其第二六檢已前犬塚信乃と喚做を懸心見村兩九の大刀とりて當家舊臣の見孫と云證據あり仕て願ひて推参る其村兩の贖物をて其奴実の振舞陽相似る敵の刺客をりければ捕捕ま欲せし思ふ倍する煖煉をて找む力士と砍伏さる芳流剛へ逃るけた大飼見八も素是走卒見兵衛蛭蛉見多し一敷劍自打緝捕の控ます做しぬる御執立あり獄吏不做され不那奴其職と嫌ひ京と久くはるますい

勤不就也。刺誹謗の戲言と吐くと少くも捕へ牢舎在りて大塚信乃を
 緝捕の與ふ一旦罪を饒されて芳流閣上へ登せし反り信乃を擲り捕を俱も亡
 命して往方と知る。其後信乃の行徳の客店へ病臥て在りて少くも折
 討隊の頭人を奉りける。新織帆大丈明風が親兵を領て那地へ向て信乃が
 首捕てかへり來り。實檢入れひひの美も亦君の知召を所へある信乃の猶死
 を亦那大飼見八等火家の夕人七八名皆大をのそ氏と做し者と俱も見
 義成不仕を寵用せらるると云ふの美の今番大石憲儀が口状を摩りて少知
 の以然定正主が里見を憎も征伐の事の始の今茲の春那信乃見八等の
 悪八犬氏が五十子の城へ乱入せ折定正の内室の刃伏へ怨み由れ是れ
 情由のいへ君扇谷殿と共侶も義成を討滅し玉いて信乃見八等の悪八犬氏を
 皆生拘を罪と糾きて誠り梟て世の人へ示しぬ賞罰正しく最愉快の事

るれ那兩大將感謝の堪也俱も恩義を拜戴して復讐の八洲の連帥と仰せ
 なるん然れが這二の大利あり介るを仍包がよも思ふ生仁義不感せぬと里
 見不加勢あるる當家の士卒勇も不勇も信乃見八等の悪八犬氏と肩を
 比下風を立てて世の胡慮あるんを義成當家へ冠せんとへも連年の闘
 戦一度も援兵をせぬ荒年中も兵糧を調りしむに信乃見八等の他を伐
 たまふも誰り君を不義とす何ふ此背を容る者ひんや當家の興廢その
 舉奉る在り義成御加勢の物体多くていふれば便佞巧小説薦れ成氏遂に
 ら惑ひて敢是非の再議及ひ然るに憲儀が對面して同意のよしを示さんそ
 次の日憲儀を召しきて成氏則對面の折在村をりて答るる扇谷山内兩所よ
 り言來され里見義成征伐の事我も亦大塚信乃もと憎と思ふよあまも妻小
 より欲する所へ委曲の五十子の城へ造るの目面談を聲えんと同意の外異議



ろろ一々憲儀の歎い羨る。来會の目を契りて退き結城へ赴けり。成朝の思
 ふよりやわりけん封内不治のありと。辭を催促不従ふ。その他千葉孝胤も
 近曾老母世を去り。猶喪中在る故。出陣克ふべからざると。亦催促の
 從ふ。又常陸の左武高久鹿島の同意の答あり。期不逮びて來會せむ。
 其志人の下風を立んと。恥る歎然。義成の良將たるを。事の成敗を量
 難く。各只その封疆を守り。逆の勝負を覘ふ。山の里も附ざり
 けり。有恁れとも定正の躬方の軍兵數萬。戰飯も亦医し。不參の
 諸侯を物とも思ふ。近日諸將の集合を待。諸隊の攻口を定んと。
 老黨有司士卒下知。その準備をぞいそせけし。

第百五十三回
 義成の謀略を呈る八百八人
 大命を聴く善巧方便

却説。日里見の間謀兒が武藏より來て。注進の言の顛末を如く詳あり。
 且盡せるも。其大要をい。義成是を。その忠告の亟るを。言町
 寧ろ。言を。恩賞の異日あり。且相共休息。亦復那地。思
 命。渡りければ。間謀兒の歎い拜して。庭門も退出。當下義成王の
 次の間。侍り。辰相清澄を召せ。その議及び。程。御曹司の獵野を
 還。せ。と。義成主。合笑。そ。便宜。義成。疲勞
 る。對面。とい。但七個の天士。目今。急。所。要。獵。衣。裝。の。終
 る。聊。厭。く。皆。疾。召。ね。とい。近習。を。走。せ。ひ。け。姑。且。て。信
 乃。毛。野。道。節。莊。大。角。小。文。吾。現。八。等。の。早。く。衣。裝。を。更。也。杉。倉。直。元。と。共。侶。不
 義。通。君。不。從。也。見。參。入。り。義。通。の。恭。く。父。君。の。朝。ひ。額。と。御。て。志。を。

大士と直元等も人馬の調煉稍果て目今かゝる東あけり休らせむせも急速の面
 談及へる疲勞を思ひたる似れども這里より方僅豫武藏の方へ遣はる間謀
 見等も五十子も歸來し注進の軍情ありの氣を告ぐ思ふを急て招き
 たる敵地の動靜と尋らんと欲し問ひて小文吾先答へ然し其裏の稟上より那市
 河より大江屋依介の注進の氣あり快船に乗走して昨日妙真許来て臣等と諮
 いふの氣より皆共侶不憊々の地方ありと尋らんと欲し然し獵所を尋らむ信乃現公
 六個の義兄弟の對面を悄地お告げ扇谷管領の事の趣諸侯を連ね水
 陸より當家と伐す欲する其言極く具を疑ふも折も人馬調
 煉の競獵も昨日まも果し依介も猶御用ありん妙真許止宿を御沙
 汰を待せしめて留めしと告げ信乃現公も亦の事那依介の事より行徳の旅
 宿より比も相識れる老實見せしむると毛野道即莊々大角等と商量は

いひ小則毛野が一策あり聞召るるものも其廣直元の義成其然とて熱頭で
 原来定正の謀る所を各既も知る然し詞を費す及ぶ毛野の何れも筆
 計あり具の教よすまほしと問ひて毛野の阿と心や找し出聲を低うして否愚意の
 別設の定正主海陸の當家と攻伐す欲する必し船を徴せ水戦の
 船より陸戦の馬も勝れ敵の船を合はぬ以前早く依介は仰付させぬ
 武藏下總の在る所の小船を多く買合せ御領の海岸に維て措く敵の與む
 不便の時を待て御方有利あり或亦市河邊に其船を沈め隠置か後御用を
 いひ願ひ早く依介の船の價を賜はるる氣をいひて請ふ義成も
 實て現を急ぎ良策に六郎兵庫助は且退りて有司下知して船の價を小文吾
 等も渡與えし之餘も所要の猶いそぐ當國並上總下總を城主諸頭人
 等も連署の急遞脚をて那敵必寄來る事由を御示して海濱の

成りて固く走し。その中堀内雜魚太郎、小林但一郎、浦安牛助、登桐山八郎、田代力助、水陸の軍陣も孰も熟る者なれば、別用を祈りて、各今守る所の廳南千代九、津館山の諸城の權且、次將の讓り衛らせ、那身の皆稻村へ参りねと下知せし。餘の明日の制度不わん、急ぐ只這二椿事の。と詞本を課され辰相清澄をる果々、却七犬士を勞ひ、船の價の莫寡り、後同を契ら、連立を退出せ。登時又義成主の七犬士をうち向ひて、目今毛野の算計の我既不用ひ。その他亦良策あり、教と受ん甚麼ぞと、向う詞の訖らぬ程、道節杖と出、稟を言傳聞ふ。今番扇谷定正、去當家と恨も、水陸の大軍を起、其監錫の今茲正月廿一日、臣等が五十子の城を攻落して、先主先父の讎言を復たひと、那人憎も且羞て、事今ふ既果と云、依んが忠告をて、夙く其をゆるり、まふは是臣等故、恨と隣國を結せ、其禍を君不徒を罪免るべし、然る義兄弟も

と相共、骨を折り身と粉ふるま、水の大敵を殺、淪め陸の寄隊を血ふく。上、我兩館の洪恩、報ひなるべく、下の房總二州の民、塗炭を極ん、素より臣等が職分也、他譲らる所なれども、人各各のつとむる、夫謀を帷幕の内、旋らして、勝を千里の外、決まらん、智をわらふれ、よまらん、又堅を推、鏡を折、勝を未然に決せ、戦へ必勝、且大敵を怕れ、士卒と虎の像く、做する、是大勇あり、所れ、戦む易く、願ふ、今の算計の毛野、問せ、臣等六名、其計は、据て、敵を破るべし、何の脚疑ひ、と憚る、処も、論を、莊外大角、小文、吾現、公も、共、おの、議を、好として、毛野を、軍師、做さ、欲と、詞、齊しく、請、稟、毛野、の、意、推、禁、ゆ、開、何、を、の、や、兵、法、七、書、の、各、も、又、学、び、足、る、者、も、夫、愚、中、で、用、いら、れ、ん、と、好、賤、く、て、專、せ、ま、く、欲、ま、り、聖、者、の、誠、る、所、我、玉、智、字、を、い、れ、れ、も、然、ら、る、智、者、の、徳、を、今、も、亦、各、と、進、退、を、俱、せ、ん、一、人、に、任、ま、る、と、辭、を、信、乃、

咳に制めり大阪辞讓の不忠不似より。智勝者仁にされも親兵衛いも還す
 ね。今日の御用お立ちまはさる。然れども我々今和殿を薦めて軍師お做さく欲まはさる。則
 館の御為と和殿も衆請の宜に候。後て辭りし智計を献る。則館の御為と
 美をあらぬ。然と解れて毛野の黙然と困下て又かよもる。當下義成王をあら
 同答の理る。ゆづり斜る。道節もあら向て各一致の忠信薄擧る。思
 余倍て最愛。我始より毛野をあら軍師おせさる。思ひかども他の年尚二十
 足らも。這六太士の弟る。萬一媚く思れて言ひれざる。救ふ介意して
 まごの美お單ざり。各反て他と薦め。其計の馮んと云大賢大度おせさる。才
 才を媚ま。能を忌ま。英雄雙立者あら。我々の如に八個の賢臣あり。定
 正數萬の勁兵あり。一時の島合。五侯精似る。伐破る難く。下
 信れ。毛野を軍師。信乃道節。莊介大角。小文吾。現八を防禦使。せん。

辭ふ。命と命。七太士。俱。身を退。額を衝。齊。言。美。言。愛
 也。側。直。元。心。情。地。感。已。現。君。君。臣。臣。思。思。歎。歎。

堪。俱。千。歳。祝。一。倍。又。義。成。主。毛。野。を。身。邊。近。找。せ。軍。師。の
 逆。敵。と。料。り。必。欲。ま。り。わ。ら。ん。其。美。甚。麼。と。叮。寧。る。同。答。て。然。し。敵。の。陸
 地。と。宗。と。必。近。近。を。貪。り。水。路。を。徑。安。房。上。總。へ。渡。を。早。く。當。城。と。捕。ま
 く。謀。る。者。又。多。し。陸。行。德。園。府。基。這。兩。敵。所。不。敵。と。引。き。奇。兵。を。わ。く
 其。破。り。易。し。水。路。の。伏。兵。を。用。る。隈。み。然。ば。と。居。る。大。敵。を。俟。べ。く。必
 必。勝。べ。計。策。の。只。八。百。八。人。を。よ。く。用。る。ふ。あ。れ。が。紐。お。做。か。あ。の。美。を
 行く。行。者。の。這。個。大。村。大。角。と。大。法。師。お。あ。く。こ。の。他。猶。一。兩。人。を。あ。て
 せ。死。の。い。へ。も。機。お。臨。て。稟。上。ん。余。る。ふ。大。師。の。前。月。より。風。寒。の。恙。あり。久。く
 病。牀。を。出。ざ。り。一。兩。三。日。已。前。より。痊。可。を。め。り。と。呼。ん。を。召。さ。必。参

るべし。そぐ先是のものと云ふ義成、王點頭て其後、大と大角のりあり
ろゆら。八百八人との何者あらん敵の大軍を蒐逆ん。八百八人々甚寡
老憶ふ人数のりあり。信乃大角の文字を富より思ひけり。飲いふを道
節壯壯。小文吾現八は是を知れり。甚麼を尋と問れて大家阿と云る。応て
亟々解ゆるけり。中道節の卒然と焦燥て噫犬阪が迂遠る。信乃折ふ
坐與が死謎語をていふ。疾う半ねと急まる。義成王推禁也。然るに
道節計の密山る。好とを何曾々々も亦以あり。我もよく考へ各も考へて解ゆ
たふ明日報け。我又憶ふ。定正頭定合體して諸方の軍兵を集む。催
促太急る。とも日と累ね。水陸共全を以ん然る。閉戦の必
十二月の初旬。在ん然。由断ま。大士等の當城。止宿して明日ら風ゆ
衆議廳。參集いね延命寺へ。今日使を遣して、大を召バ明日の多るべし。又武

者助の明日朝早天馬を瀧田へ走らせ。這一椿事と老館の告事あり。ね汝が親
木曾介及堀内藏人の老衰起居勝むと。今あつて。知ら然るを
苦勞小思ふ。我幸いハ八犬士あり。又辰相清澄等の良臣あり。且勇士未匿る
老致仕の老人枕を高く。凱旋の日を俟べ。と指示して慰む。義通は疲
勞れ。卒々俱して退り。ねと仰ふ。義通は。坐と退る。父君の。おんを
舒て立ぬ。ハ七犬士の。杉倉直元と。俱に言美と。御曲目司。相従て退り。けり。
徳而其詰朝。義成の。両家老東六郎辰相。荒川兵庫助清澄以下。の兵
頭。従へ。風く。衆議廳。おん。ハ七犬士も。相俱。刀。其席。存。當下。小
文吾。信乃。現。八。昨日。命。せ。れる。大江屋。依。介。買。合。も。死。船。の。價。と。數。の
と。他。小。遞。與。て。今朝。市。河。へ。還。け。る。と。夢。え。上。は。却。昨日。毛。野。か。い。り。ハ。百
八人の。美。小。速。信。乃。と。大角。と。莊。介。の。稍。解。ゆ。る。と。云。又。道。節。と。現。八。小。文。吾。の。

八人の二言を悟るるの八百八の言を詳るるを義成主と合笑て我亦當
 る違る後知ねども辛くして思ひ給ふ各且の事と俱に寫し合して見ん
 料紙硯のあつちのさつとて君臣各書寫あつち合して俱に是を見し道
 節現八小文吾の只火の一字を寫し又義成主と信乃大角莊介は是則
 風火の二字と道節これを眉と顛單めて八人を合され火字の論を
 去風も八小従ひ虫も従ふ故虫も八日あり其卯字ると王元ハ論衡あり
 介ると八百の風とさつといふを難まれば信乃の風も八百の虫も勿
 論さつ古文の亦風も作りて八小従ひ百小従ふ者漢人の諫書在り必
 疑ひる處べしと解れ道節感服して現八小文吾共信乃及びさつと思ひける是を
 見もさつもあける辰相清澄の自餘の諸臣も感して已む程の義
 成主の憶さつも笑れりさつと毛野を吸被て軍師乍麼風火の二字の當り

これ我又悟ることの曩の那妙椿裡見が八百比丘尼と自稱するは這八
 百も亦風へ他の雍尾龍襲の玉とて風と自由の起る風裡の玉とあつて今中
 登る悟りぬと解し一の毛野が志と共信乃大家奇と稱ける登時又毛野
 がさつ那雍尾龍襲の玉の八百八人の計策も必是用ふ死要緊の東西の
 とさつとて思ひ給ひは御意の事及びさつ事の成る死兆の玉を今も
 各不藏めさせぬと大師の参り計策と説くべしと折遊與さるるか
 公を義成主とあつて那玉の今もあつて合さつ易けれども大の來會さつも
 あつて其故の昨日使を延命寺へ遣して大の信乃とせし大の解ひて且公
 言不敬ふいへも野納佛門入りよ未嘗五戒を破らざらば何ぞ出家
 人の相忘しる軍陣投伐の商量席も口れて美るべし耳のひも且賤恙と痊
 可よ卦はぬとさつと鬚鬚と剃らる頭顱を削らる其美の御免と被下

云強面は答へざる。佳れ、別人を用ひん候と問ふ。毛野の守あまふ否御説でいへども。那師父と大角を尋ね、拙策を仍ひて。其故の箇様々々佳れ、あふいと。言詳ふ耳。其生れ、義成王教せ、あふいと又使を遣して、促し、迫り、迎へ候。否、那師父の木訥なる事より、その君命の中、從する所あり。殺生戦争、即是、臣等御使とて、今大角と共、侶命寺へ赴きて、説く。兼、服仕らん。猶幸ひ、その那師父久し病着せ。鬚も頭髮も長く、伸て、面瘦て、をひらぬ。あふいと敵を計る、妙に大角の拙策を既示し、早く準備仕りぬ。身の暇をぬらぬ。敵の大兵五十子へ集合ぬ。前、師父と共、夜に紛れて、快船に乗せ。敵地へ遣まべ。薙鬣の玉を賜ふべ。と急迫し、請へ、大角も毛野が計策と好と稱て、俱に約んと稟まを。義成則、その議不儘して、薙鬣の王と、遽與さん。そのあふいと、清澄、小尋ぬ。清澄答て、然し、此の件、奇玉の、鬘、小大江親兵衛が、稟まを、あふいと、臣等預

す。なり、一、二、と、ゆゑ、死、寶、お、ゆ、れ、大、士、も、が、那、八、圍、の、靈、玉、お、擬、へ、て、且、失、は、ら、ん。為、お、と、母、の、腰、お、吊、て、ゆ、べ、今、も、あ、ふ、い、と、の、い、う、軀、て、腰、を、撈、り、て、表、裏、を、解、く、進、ら、ま、れ、ば、義、成、受、命、の、い、う、と、見、て、を、隨、毛、野、お、渡、し、ま、べ、毛、野、の、ち、戴、は、れ、懐、不、楚、と、交、め、つ、大、角、と、共、侶、お、退、り、立、ん、と、て、け、り、と、辰、相、急、お、喚、け、り、大、阪、生、御、使、あ、り、延、命、寺、へ、赴、か、し、伴、當、の、准、備、を、ま、せ、ん、騎、馬、を、路、次、を、い、そ、ぐ、ら、ん、と、心、づ、け、い、け、り、毛、野、答、て、否、思、ふ、よ、い、の、い、う、の、伴、當、ま、死、に、反、て、ま、り、騎、馬、を、ま、せ、り、て、悄、地、お、ゆ、ん、と、い、ひ、う、此、下、退、り、て、却、君、侯、と、義、兄、弟、を、別、を、告、て、大、角、と、俱、に、延、命、寺、へ、ま、り、立、ふ、け、り、姑、且、一、て、辰、相、の、清、澄、お、い、ふ、や、宣、ふ、大、士、の、奇、才、を、今、ゆ、り、い、い、ん、言、ゆ、り、や、これ、と、就、中、大、阪、が、八、百、八、十、人、を、至、妙、に、但、今、番、の、水、戦、を、唐、山、三、國、の、時、吳、魏、赤、壁、の、故、轍、お、據、り、風、と、火、を、り、謀、る、と、も、敵、も、亦、然、な、ら、り、の、利、害、の、前、より、知、れ、る、ま、り、べ、い、の、ま、を、い、く、お、思、ひ、ぬ、と、問、へ、清、澄、沈、吟、し、て、然、し、咱、も、疑、ひ、あ

まども那人脱落あべくもあまを館の知せぬあつんとあを義成主うちあつて。否
 とよ那赤壁の閉戦の周瑜の敵の船を焼ける曹操が救ふ冬月、東南の
 風稀へと思ひ故に然るを孔明が風を禱り死と羅貫中が演義を載るも
 陳壽が三國志の風を禱るの事。恐る那風の偶然あつて開き左も右
 もあれ毛野の必胎と奪骨を換る奇計あつて落成を見る如とあつたと論
 辰相清澄あつて信乃道節、莊人現八小文吾等と俱に餘談の
 既其けり介程、大阪毛野胤智、大村大角、礼儀の俱に野服を編笠を深く考
 伴當才の二名とて情地、白濱の延命寺へ赴け、あつたの時、大法師の風
 寒の欠安稍瘥るものう。猶屏坐て方丈小在り。毛野大角が館の御使を奉
 對面を登時毛野の大角と俱に上坐あ着てあつた。師父貴恙の平安あつた昨日の

軍旅の事成就館の口をせぬの師父の云云と難義を舒てあつた。あつた
 猶尊命を傳へ為我御使を参り。一重毒時左右を遠さけぬとあつた
 大のうちあつて然し出家人は相心くぬ軍陣の事。再命も兼る及
 且左右の人あつた。只是念成の他、腹心の徒ら侍り。侍りあつた。登
 茶をまわらせよといふ。念成のあつた。厨の方へ退りけ。姑且大角のあつた
 師父の未だ知りぬ。那扇谷の管領が。我を憎むの故。今番山内顯定
 主と和睦あつた。且諸侯と連。大軍あつた。水陸より當家を伐ち。去実不足
 危窮存亡の秋。あつた。館の宵衣旰食。軍議小暇あつた。則犬
 阪を軍師あるされ。犬塚以下我を御使あ做され。且師父を請て。謀計を示
 ま。欲いぬ。御身の欠安の瘥る。あつた。洗りて参りぬ。抑泰れる。快將行
 歎。継出家人あり。とて。其園は居て。其園の亡るを外小見。不忠不義の罪免



毛野大角
延命寺の方
丈小造



るを亦釋迦の教を欲と詰ると、大いさあむ。然れ我の庸常なるは家
人と同トかま。命の御恩をうもむ。而館の御為。毎々眞福を祈る。我職分と
のべけれ。當は潘福小と云と雖賢臣勇士亦匿く。この何ぞ人多死如軍
旅の事。要るは出家人を然る。席へ召きて何の事せん。薦る者の死に思
ひの事。事ふと。辭ふを毛野の推林示ゆ。師父いと憚りある言まら。身只
其二と知り。其二と知り。敵の水戦を上日と。數百艘の艦艦を連
ね渡して伐も欲ま。その既の事。其敵船を拘る。風と火あく者あむ。
然敵の與風を起ま。這算計を仍る者。今師父あむ。外の人。夫甲由目を
身お探ひ馬を跨り。元と舞いて。敵を伐と課。出家人。似けり。と推辭の
ふも理らむ。君の為民の為。貌を殊。名を隱。敵を欺。て風と祈。是
善巧方便。妄語の一戒を破る。あむ。その美を思ひ。と説けて。大い沈吟

去て。然る情由もあむ。けれども風を起して。其風所以。船を焼て。敵を亡む。親
人と殺す。同ト。非如頭顱を刈らむ。も然る殺生とせんや。とよく固辭し。听さ
る。大角徐論まら。師父の主意。何を不指。其風とて。敵を破る。殺生
とて。嫌ひぬ。大敵利を以て。渡り。来て。城を拔。人を屠。然る師父の心。單り。
自家の士卒。千萬名と。自殺し。あむ。同ト。利害損益。六の擧。於て。何の道も
免る。がむ。恁れ。敵を害。と。御方の戦ひを。幫助。と。其功德。孰を。其風を
起す。故敵を殺す。嫌ひぬ。凱旋の後。水陸道場。敵の菩提。を。吊
ひぬ。欽び。皆清果。を。引ん。夫生ある者。必死あり。死して。活佛の。引道。を受。こ
む。疎。疎。千慮の一失。矢と。理。通。兩才子の。意見。大い。困。果。黙
然。半响許。思ひ。復。う。ち。領。去。是非。及。我。其。算。計。不。從。て。
左も右も。ま。けれ。も。我。法。力。の。せ。い。ふ。く。風。を。起。ま。ま。を。よ。せ。ん。の。毛。什。麼。と。誅。り

問ハ毛野ハ咲々懐より。獲龍衣の玉と。裏の尻ふ出して、大示しくひやう。師父先
 是を見ぬひ。ちる裏ハ妙椿狸児ガ風を起去一奇貨也。那獲龍衣の玉。即是
 然。是をめて招くと。死ハ東西南北思ハの隨ハ勁風を起さ。投る方素を引く
 易。故ハ館ま乞まらて。推乃來て師父の所用と。我謀る所ハ箇様々々。恁
 恁まひと。具ハ説示して又ハ。師父ハ今宵鳥夜ハ紛れて。悄地ハ大角と共伯ハ
 柴濱ハ推渡り。權且谷山ハ躲れ住りて。異日件の筆計を以て。勿論當山の衆
 徒ハ寄隊を調伏の祈禱の為ハ。三七日富山の品山屋ハ龍ると。立て立かひ。あ
 餘の準備ハ箇様々々。とあるゆえ。獲龍衣の玉を。遞與せ。又大角ハ俱ハ額を
 裏ハ。密談ハ目を消しけり。畢竟ハ夜、大角ハ悄地ハ快船ハ。乘て俱ハ
 武藏の柴濱ハ推渡りて。後の話説甚麼を。開ハ下回ハ解分るを。聴ハ。かし。
 南總里見八犬傳卷之三十二終

○八犬傳第九輯下帙下中編乙號上分卷五冊書画割刷目次

出像

柳川重信畫

補助画 卷之三十一末ヨリ
 歌川貞秀

淨書
 卷之二十九 谷金川
 卷之三十一上 澤金次郎
 卷之三十一下 常盤園
 卷之三十二 澤金次郎

彫工
 卷之二十九 澤金次郎
 卷之三十一上 常盤園
 卷之三十一下 澤金次郎
 卷之三十二 澤金次郎

○曲亭公翁新舊著編畧目 書林 文溪堂藏版

八犬傳第九輯下帙下乙號下編 分卷十冊書画推續ハ出版
 全部九十二冊大團圓ハ至リハ

お花新書 中本第一編第二編各三冊○翁の中本の作文化以來久く多クハ
 本房強て乞求ゆて。あふあ作也。初編三冊引續ハ近日出版仕ハ

開卷驚馬奇俠客傳第五輯 作者年々八犬傳の著編ハ餘筆ハ暇多クハ
 書中絶の処近日稿成ハ出版遠クハ存スル

菅聖廟画傳記

古人北尾重政画全五冊○この書享和中公箱の舊作なり故ありて久し刑行せり一と本房求得て新板とて近日發行

近世説美少年録第四集

この書も快客傳と同美と考ふる中絶ありと考ふるに促と遠とを分たせんとて出板近きなり

著作堂一夕話

是の翁の隨筆之初集大本三巻近刻○嚮小書目録一席話と考ふる者あり誤りの書名あり李贄が山中一夕話と擬せり

玄同放言

龍澤八翁隨筆大本六冊○この書本房の藏板あり一より佳紙精製年々少ゆる書目録小戲号と記せり翁の本意ありと考ふる因て今改之

家傳神女湯

俗人の湯一包包百病治の功ありと云ふ前記後記あり症あり考ふるより用れらるる功ありと考ふる

精製奇應丸

大包八金葉茶中包代一反茶小包代五ト云ふ不仕の茶種と考ふるに世の功ありと考ふる

熊胆黒九子

熊胆の汁を以て九子と考ふる一包代五ト云ふ功ありと考ふる

婦人の妙茶

婦人の妙茶一包代五ト云ふ功ありと考ふる

製茶本家四谷茶の町

瀧澤氏弘所立留町中坂下南側四谷茶の町

御茶抄の仙女香

一包四十八文 黒油美玄香 一包四十八文

金匱救命丸

一包三十二文 本御林氏製 弘所 丁子屋平兵衛

今般賣出の八犬傳九輯下帙の乙號上編四巻の摺紙數九二百二十餘張有之他作の乙號本五巻の紙數字數共ニ反て多ク則分巻五冊不致の乙號の下編十冊も右同様を推續近日又出版仕 文溪堂再白

天保十一庚子年春正月吉日發行

書行

京都 大文字屋得五郎
 大阪 河内屋茂兵衛
 同 河内屋太助

江戸 大傳馬町二町目
 丁子屋平兵衛板

